

火星

平成二十四年二月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

柚子ひとつづつ湯へ放り込める音

鯉揚げに届く酒瓶粉雪舞ふ

毛皮より毛皮へ赤子わたされし

雪囲して観音の臍たしか

兄弟の櫓もどり来しばかりなり
鉄棒の影に嵌れる土の凍
放り込みし箱のかたちの大鯨鯨
牡丹肉出そろつてゐる広間かな
凧の壁に囲まれ酔ひ早し
寄り合うて流れてゐたる雨の鳴

太白星

柳生千枝子

霧払ふ風が霧呼ぶ風となる
吊橋へ山男霧まとひ来る
冬の水てのひら薄くなりけり
温め酒次第に繁き夜の雨
遠ざかる後ろ姿や枯銀杏
枯蔦の連綿として師を識らず
冬が来てをりぬ庭掃く竹箒

杉浦典子

冬の川嘴の啞へしもの光る
ゴム長の逆さに干され葱畑

裏山の鋸の音止み冬の虻
神留守の豆煮る昼を灯しけり
洞のある楠に集まりくる落葉
雌滝より雄滝へ吹かれ冬紅葉
梟と病ひとつを待みとす

浜口高子

遠神楽刈田の煙にとぎれつつ
丹波しぐれ後部車輻の置き去りに
猟銃とビオフェルミンが宿の棚
羽づくろふ鴨に煙のただよひ来
御火焚の櫓はぜにけり葛湯吹く
まづ嚏落とす高座のざこばかな
風よけてゆく文旦の枝のしなひ

火星作品

山尾玉藻選

鵲の贄近江の月にかはきけり
大和郡山城 孝子

瀧音に山の深さや神無月

かいつぶりむかしの貌に浮き来たる

冬鹿の耳にありたる息づかひ

たてよこに書店をあるく十二月

明るみへ出して重たき莖の石
吹田田中文治

短日や机ひとつの衛士詰所

空狭き家でありけり三十三才

白樺の林に日ざすしぐれかな

冬晴れにけり米櫃の空の音

黄落到閉ざす阪本まむし店
八幡大山文子

ひりようづの芯に銀杏初時雨

末枯やむらさき座布団運ばるる

霧深し 箒を使ふ 蝶ネクタイ
てつちりやとなり 座敷の静かなる
高円の雲のま白を冬支度
りんご一つ握りしばらく冬の凧
霜柱踏みしむ音を身の内に
いくつももの鉢水底に山眠る
つごもりの闇あたたかし男山
波に乗る鳥のまなじり冬はじめ
炭焼かぬ日の畑にをり冬霞
白菜に塩振る指のきらきらす
お百度を踏む白息に加はりぬ
薪小屋に隣る味噌蔵山眠る
看取る我見らるる我や冬月夜
主なき椅子に聖書や冬はじめ
雑炊をあつあつ言うてひとりなり
祝はれてひとつ齢とる湯ざめかな
鍬の柄に羽光らせて冬の蠅

坂口夫佐子

宝塚蘭定かず子

西宮米澤光子

選のあとに

山尾 玉藻

末枯やむらさき座布団運ばるる 大山 文子

かいつぶりむかしの貌に浮き来たる 城 孝子

「むかしの貌」とはどんな貌なのか、と理詰めに考える必要はない。敢えて言うなら、親しみが持てて優しい感じの貌、懐かしい思いにさせる貌なのだろう。水に潜るとなかなか浮き上がって来ない鳩を待つところ、思いがけない所に浮かび上がっては驚かす鳩への呼びかけの思いが、思わず「むかしの貌」の表現となったのである。同時発表作へ冬鹿の耳にありたる息づかひ、寒気の中で神経を耳に集中させて佇む鹿の姿に向ける作者の眼差しに、非常に沈静したものを感ずる。

冬晴れにけり米櫃の空の音 田中 文治

うっかりしていて米櫃が空っぽとなっていたのだ。空の米櫃が思いがけずあつげらんとした明るい音を立て、そのひびきが自ずと「冬晴れにけり」の屈託のない明るい思いを呼んだのであろう。へ明るみへ出して重たき茎の石、薄暗く寒々しい場所に据えられてこそ「茎の石」であり、日の当る場所へ出された「茎の石」の違和感が「重たき」の一瞬の実感を呼んだのだ。「茎石」の本意をついた一元句と言えよう。

古来むらさきの色は高貴のシンボルとされてきた。この座布団、例えば僧侶用のとっておきの座布団なのかも知れない。草木の枝先が枯れ始める秋めく中を、ぶ厚い座布団が丁重に運ばれているという、それだけの景。こんな風に俳句はうっちゃらかせば良い。但し、掲句のように取り合わせのほどをよく心得てこそ、このうつつやらかしによつて生まれる余情、余韻を大いに期待できると言えよう。

高円の雲のま白を冬支度 坂口夫佐子

奈良春日山の南に連なるのが高円山、その麓に白毫寺がある。掲句の「高円」は高円山もしくはその麓一帯を指すと思えばよいだろう。高円辺りを流れる真つ白の雲を時おり見やりながら、「冬支度」に余念がない景である。固有名詞「高円」の慕わしいひびきが「冬支度」に相応しい穏やかな雰囲気を増幅させる。

波に乗る鳥のまなじり冬はじめ 蘭定かず子

猛禽類は勿論のこと大方の鳥類の眼はきつい感じがする。雀の流し目さえ余り愛嬌があるとは言えない。北から渡ってきた水鳥たちもそのまなじりに引き締まったものを湛えているのだろう。作者はその様子に鳥たちの気構えのようなものを感じ取り、「冬はじめ」の軽い主観をふと覚えたのである。「鳥のまなじり」はその主観の反映。(以下略)

同人 I

米澤光子

恒星圈

天谷翔子

巖に日の当たりて冬の匂ひけり
寒林や遠ざかりゆく鈴の音
また同じ思ひに戻り葛湯吹く
逢ひに来よ黄落の下くぐり来よ
綿虫と連れ立つてゆく父母の墓

飯塚糸子

児の触れてゆく黄落の百度石
神迎ふ羽二重色の神馬かな
石畳踏んで馬場まで十二月
逆茂木の柵の縦横秋惜しむ
蒲の絮入江の窪へふりにけり

渡辺数子

骨董屋のかんざし研く近松忌
会ひたくて目深に被る冬帽子
つながらぬ携帯電話冬の星
葛湯吹いて明日の天気はかりをり
蟪蛄や見返り美人のさまに枯れ

絵襖の白眉の爺と目の合ひぬ
長靴の神官が鴨数へをり
テールを出すや木の実の降る中に
熱爛やまだまだ生きさう姉いもと
蝦蛄葉仙人掌に無数の蕾日の短か

渡邊美保

鶏くる角材積まれある空き地
十二月犬枇杷黒く熟れぬたり
芦原の翳りより鷺発ちにけり
枯野着一両電車からつぽに
厚物の菊を咲かせて逝かれけり

獅子座

山尾玉藻推薦

川端 俊雄

神頼みするほどでなし小春空
点滴に刻うつりゆく雪降りつつ
眠る間の癒え疑はず冬もみぢ
病人の放昆待ちぬて砕めり

涼野 海音

ブーメラン鵬の空より戻り来る
星流れけりキーボード打つ音に
唇に薄荷匂へる月の客
受付にどんぐり結婚相談所

田中 文治

身の丈をくづさず風の枯尾花
三輪山の風のとぎれし冬すみれ
草の実や名を成す友の遙かなる
綿虫や女易者のひくき声

根本ひろ子

小春かなインクラインをこゑ渡り
合掌の甲に日の射す返り花
神留守を在す満月の白さかな
冬の月カードで扉開けにけり

笠置 早苗

立冬の沈む太陽胸に受く
水仙の花かたまりて背きあひ
薄日さす畳廊下やすがれ虫
層籠に紙ゆるむ音夜長かな

山本 歌子

花八つ手夕暮れどきの柔らかき
裏庭になじむ箒や冬紅葉
蕎麦打てる男の襷朴葉ふる
古書店に絵本はみ出す冬銀河

井上 恵李

末枯や週末ごとに傘持ちて
冬うらら白無垢のゆく天守閣
その奥に末枯るる音櫛の森
立冬や洋館の窓なないろに